

身体発達にともなう被服行動の変化

○高部啓子* 桐原美保** 布施谷節子*

(*大妻女短大, **大妻多摩高校)

【目的】被服の選択行動やファッション意識に関して、小学校 1年から大学 1年までの13年間における平均的な変化状況を明かにし、さらに身体的成長の早熟や晩熟の違いが選択行動やファッション意識に及ぼす影響を検討した。

【資料及び研究方法】予備調査を経て、1996年12月に、昭和50年～52年出生の女子短大生 294名を対象として、小学校 1年から現在までの過去に遡った縦断的資料を、健康記録カードの記録、本人や家族の記憶やアルバム写真をもとに調査した。調査項目は各年齢ごとの身長と体重、初潮年齢、並びに各調査年齢時のからだつきの意識や、色、服種、流行などに関するファッション意識及び被服の選択行動など合計15項目である。身体発達を初潮年齢により早熟、標準、晩熟の3グループに分け、身体発達の遅速と被服の選択行動やファッション意識の変化との関連を検討した。解析方法は、単純集計、クロス集計、分散分析によった。

結果：①ワンピースやキュロットスカート、ショートパンツは小学校高学年から着用が減り、ズボンが増えてくる。と同時に女の子っぽいものが好まれなくなる。また流行が気になり始め、黒、グレー、ダーク系などの色を好むようになる。被服の調達を親がするのは小学生までで、高校生では7,8割が友人または自分で購入するようになる。②早熟グループでは自己のからだつきに対する意識が、他の2グループに比べ、早くから高まり始め、それにともなってからだの線が目立たない衣服を好んで着るようになるなど、成長の遅速と被服行動の変化との間には関連が認められた。